※　ふしぎな扇

昔、あるところにあまり働きたくない男がいた。あるとき男は、仕事もないし観音さんにおねがいすることにして、三、七、二十一日おまいりをした。お宮からもどるとき、石段で扇をひろった。ひらいてみたら片方が赤く片方は白かった。それであおいだら鼻が高くなった。これは困ったと石段に腰をかけて考えたがどうにもならない。またあおいだら鼻がだんだんちじんだ。赤い方であおぐと高くなり、白いのであおぐと低くなるのであった。家に帰ると、家のものが、なにさずかった

かというので、これだと扇をだしてみせたら、なんだこんなものというので、(妻)アバの鼻をたかくしてやった。アバは困った。あまりこごとを云うからだと低くしてやった。

その後江戸にでた。こまもの屋になって、呉服屋に行き、娘をみようとしたが、でてこないためいろいろ願ってみてもらった。そのとき扇であおいだため鼻が高くなった。男は小まものをしまうふりをしてまたもあおいだため、ぐんぐん伸びた。家では大変なさわぎとなり、医者よ、禱祈よとつとめたが、なおすことができなかった。娘の家では、たてふだをたてた。それをみた男は、娘の家にいってなおしてやることにした。娘は、床に入っていたが、鼻がうら板にとどき、身うごきもできない状たいだった。

男はなおすには四、五日かかるが、必ずなおすからといい少しあおいでやった。家の人たちが部屋に入ってみると三尺程短かくなっていた。またつぎの日、つぎの日と、三日ほどかかってなおした。男はお礼としてたくさんお金をもらった。

宿に帰った男は、あおぐとどの位高くなるかと思い二階の窓をあけてあおぎ出した。
鼻はどんどんのびて、四国の金比羅さんまでのびていった。ちょうどそのとき金比羅さんの屋根をふいていた。かやては変なものがのびてきたのでつかんだ。男はあわてて白い方であおいだ。鼻がとても重いのでよくみたらはさみをもった男が乗っていた。それでどこからきたかと聞いたら、金比羅さんからといった。かやてもここはというので江戸だといったら、はなのお江戸かといったとか。